

## 松下国際財団 研究助成 研究報告

【氏名】アナトラ・グリジャナティ

【所属】(助成決定時)九州大学大学院 人間環境学府 教育システム専攻 大学院生

【研究題目】中国新疆における少数民族双語教育とその受容-「和諧社会」論の視点から-

### 【研究の目的】

多民族国家中国では、国民統合を念頭においた漢語普及と少数民族言語・文化の尊重とを両立させる政策として「双語教育」(少数民族言語と漢語の二言語教育)が提唱され、小学校段階からその徹底した普及活動が着手されている。現在は、計 21 の民族言語を用いて、全国一万ヶ所余りの小中学校で双語教育が実施され、対象学生は 600 万人余りに達している。しかし、双語教育の形態や実施状況は、地域あるいは民族集団によってそれぞれ異なっており、抱えている問題も多様である。

本研究は、中国新疆ウイグル自治区(以下「新疆」と省略する)における双語教育の実態解明を通じて、少数民族地域の全体的な社会文化状況に大きな影響を及ぼす可能性を持つ双語教育政策の導入過程の実態を教育および社会文化的コンテクストの両面から総体的に明らかにし、その課題を指摘するとともに多言語共生社会への展望を探ること目的としている。

### 【研究の内容・方法】

本研究は、基本的研究手法として、人類学的フィールド・ワークの方法を用い、中国の西北部に位置し、中国の中でも多民族、多言語、多文化の地域である新疆を対象とする。新疆は、他の少数民族地域と違って、イスラム系の少数民族が集中しており、特に近年は政治的に敏感な地域となっている。民族教育をも含めて、新疆社会で起こっている様々な「変化」に関する従来の研究では、ややもするとウイグル社会に与えたポジティブな影響ばかり取り上げられ、現地の現状や人々の意識をすくい上げ、考慮した見解や指摘が見られないことが多い。今回、新疆の双語教育を取り上げる本研究は新疆研究におけるこうした限界を補うことをひとつの重要な目標においている。本研究が採用した研究方法は、フィールド・ワークを主とし、資料収集、参与観察、インタビュー調査である。

資料収集では、日本、中国および新疆での双語教育研究の関連文献と、中央政府および新疆政府の配布資料(公文書を含む)を収集した。本研究では政府および教育庁が配布した双語教育に関する公開公文書を扱っていることを断っておく。

参与観察では、教師の視点に立つか、児童・生徒の視点に立つか、あるいは教室の後で参観者の立場で観察をするかによって、現象の捉え方が異なってくる。本研究では、双語教育の実態を把握するために、可能な限りその三つの立場からの参与観察を実施した。

インタビューは、政府機関や教育庁の関係者、現地の研究者、教員、児童・生徒および大学生、親、一般庶民を対象に幅広く実施し、異なる意見や考え方の関係性や交渉過程に十分留意しながらヒアリング調査を行なった。

### 【結論・考察】

本研究では、中国少数民族地域の社会文化的状況全体に大きな影響を及ぼす可能性を持つ双語教育政策導入の実態を、学校教育およびそれを取り巻く社会文化的コンテクストの両面から実証的に明らかにするという目的にもとづき、まず新疆社会における双語教育が、ウイグル語を教授用言語とする双語教育から漢語を教授用言語とする双語教育へと急激に転換している政策および実態を確認した。同時にそれを取り巻く人びとの社会的言語環境でも、民族構成の違いによる地域性を伴いながら、漢語使用の拡大が進みつつある現状を明らかにし、教育と生活の両面における双語化の流れを確認した。そのなかで幼稚園から大学にいたる各教育段階で双語教育の方法や双語教師の養成が追いついておらず、急激な漢語導入が授業の質的問題や児童生徒、学生の学力問題、学校不適應、あるいは家庭内での民族的アイデンティティをめぐる親子関係の齟齬、民族語の維持に関する大人たちの不満や懸念などの問題が生じている実態が明らかになった。

最後に、これら明らかにされた諸点にもとづき、政府もその国家目標に掲げる和諧社会実現に向け、少数民族の意向と現実を踏まえつつ、現状の双語教育の実施過程の再調整や民族語の使用に対する制度保障の再確認をおこなうことの必要性を指摘した。